

相次ぐ空襲に追われた日々

上阪 忠司

私の小学校最後の運動会の日だった。昼の弁当を共栄国民学校の校庭で食べようと思った矢先である。釧路地方で初めての空襲警報であった。全校児童はもちろん親ともども逃げるように家に帰った。空には米軍機がゆっくりと飛んでいるのがはっきりと目に映る。そのころ父は「近いうちに必ずたくさんの飛行機が釧路を襲う」と話し、私と二人で駅裏の共栄大通の自宅に二、三日をかけ防空壕を造った。そして昭和二十年の七月十四日から十五日、釧路大空襲に出会い、父母と三人でグラマン機が火を噴くのを壕の中からおつかなびっくり見上げていた。その時の大爆風で、付近の防空壕はすべてといつていいくらい破壊された。駅前の「とらや旅館」に落ちたためだと聞いたが、その恐ろしさは忘れられない。

次の日、標茶の姉夫婦のところへ疎開するため両親とともに朝一番の列車に乗った。出発の途中車内の窓が真っ赤に染まった。それは旭小学校が炎に包まれていたからだった。途中鉄橋が落ちていないか心配するなど、標茶まではそれはそれ長く感じた。到着したら母が、乗ってきた列車に深く頭を下げていたのを覚えている。姉夫婦の家に向かって歩き始めた直後、飛行機が三機見えたと同時にサイレンが鳴り響いた。道路わきの小川の大きな木の陰に三人でうずくまつた。近くの麻工場に低空から銃弾が撃ち込まれたたび、川の水が波立つ恐ろしさは、今でも、いや一生忘れる事はないと思う。無事に着いた時、姉と母は涙を流して抱き合っていた。

戦争の恐ろしさは、私の子供たち、そして孫たちにも話し伝えていかなければ、と思う。二度と起こしてはならないのが「戦争」である。